

# 新たな学校文化を創造する特別活動に関する実践研究

福 地 淳 宏

岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター

## Practical Research on Special Activities Which Create a New School Culture

Atsuhiko FUKUCHI

キーワード：年間9スパン指導構想 学校行事 生徒会活動 主体性 合意形成

### I. 実践研究の背景と目的

#### 1. 実践研究対象校

本実践研究は、岐阜県の瑞穂市にある市立穂積中学校を対象として実践・考察を行う。本校は、生徒数が700人を超える市内で最も大きな中学校であり、開校75年目を迎える伝統校である。過去には、器物損壊や生徒間暴力等、生徒指導上の問題行動が横行した時期があったものの、平成22年の校舎改築を機に、当時の職員、母校愛あふれる保護者等地域住民の尽力により、学校としての落ち着きを取り戻すことができた。真面目に学習に向かう生徒の姿が具現されるとともに校舎内外も美しく整えられ、学校全体に安定感が生まれるようになった。しかし、つぶさに事実を見ていくと、「集団としての規律や統一感はあるが、一人一人の主体性・自発性は育っているか」「全体に同調し逸脱する生徒はいないように見えるが、一人一人の適応状況はどうか」「決められたことはきちんとやるが、自分たちで問題を見付けよりよく解決しようとする自治力は育っているか」など、整えられた生徒全体の姿に埋もれがちな課題が見受けられた。

#### 2. 本実践研究の目的

特別活動は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、資質・能力を育成することを目指す」教育活動であり、育成したい資質・能力については、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という三つの視点で整理されている。<sup>1)</sup> これらは、加速度を増しながら変化し続ける社会に生きる生徒が、その変化に向き合い、様々な人と協働しつつ未来を創る担い手として主体的に生きていく力を身に付ける上で、まさに欠かすことができない重要な視点である。しかし、これまでの本校の指導は、「望ましい集団活動を通して」という原則を重視し生徒の姿で成果を上げてきたものの、結果的に、学校の規律を取り戻すための「集団づくり」自体が目的になっているのではないかと懸念がある。このことを踏まえ、本実践研究では、未来の社会の形成者となる生徒一人一人が、自分たちの意思で主体的に生きようとする新たな学校文化を創造する特別活動の在り方について実践・吟味することを目的とする。

### II. 実践研究の方法

#### 1. 本校の実態

本校は、学校全体に規律があり、生徒たちは学習にも落ち着いて取り組むことができる。反社会的な突発事案対応は限定的で、多くの生徒たちは安心して生活している。素直・真面目であり、諸活動に対しても一生懸命に取り組む、行事で示す迫力ある姿については一定の評価がある。

一方で、一定の安定性に身を委ね、全体の雰囲気や流れに同調しがちで、教師からの注意や点検が活動の起点となりがちなど自発性や自治力は弱い。活動は展開されるものの、自分たちで課題を見付け、考え合い、新たな実績を創ろうとする主体性や実践力は弱い。また、集団全体による活動が大切にされるあまり、その雰囲気に対する不適応から不登校傾向を示す生徒が見られる。

## 2. 研究の重点及び進め方

以上のような生徒の実態を克服するために、平成29年度から令和元年度までの3年間、特別活動を基盤として、以下の重点を定め研究を進めた。それは、改革のための改革ではなく、「落ち着き、安定、集団としての統一感」から「質的向上、個の主体性の向上」といった新たな学校文化の創造へ転換を図り、5年後、10年後につながる教育に向けて種を撒くことを念頭に置く。

- (1) 学校行事をこなすための場当たりの指導ではなく、学校行事と生徒会活動を関連付け、「人間関係形成」を通して目指す生徒の姿や身に付けさせたい資質・能力を明らかにし、生徒の主体性を重視した指導を展開する。
- (2) 前例をいかに踏襲するかという意識ではなく、より発展的な取組にするために、学級・学年・全校による「合意形成」「意思決定」の過程を大切にし、これまでの取組に付加価値を付けるとともに、「社会参画」の意識を醸成する。
- (3) 形骸化が指摘されている生徒会各種委員会の活動について、本来の役割や機能を明確にして新たな活動を工夫することで生徒の主体性や創造性を引き出し、積極的な貢献意識を醸成し、「自己実現」につなぐ。

成果と課題については、全国学力・学習状況調査（文部科学省）、児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）、生徒・保護者による学校評価（生徒や保護者）、教職員による自校評価等の結果、及び生徒自身の声をもとにして、分析と考察を行う。

## Ⅲ. 実践内容詳細

### 1. 卒業式における「屹立した一人」の具現

本来、特別活動における学校行事は、体験的な活動を通して集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、一人一人の資質・能力の育成を目指すもので、実施そのものが目的ではない。特に儀式的行事は、形式的になりがちだが、「学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるようにすること」<sup>2)</sup>が求められている。卒業式は、その中でも9年間の義務教育の集大成であるとともに、本校の3年間の教育の成果を生徒の姿で示す場であり、まさに現行の学習指導要領における特別活動が重視する視点「自己実現」につな



図1 屹立した姿を示す瞬間

がる指導の場と考える。しかし、本校では、卒業証書授与の登壇は代表者数名であり、第二部における複数曲の学年合唱披露など、集団全体の統一感や安定感、迫力や感動が重視されてきた。そこで、義務教育を終え社会へ巣立つ「個」が、自信と感謝、新しい生活への希望と決意を示す場として「屹立した一人の姿」の具現を求め、卒業生全員一人一人が登壇し、卒業証書を受け取る方法に改めた。（図1）その姿に向けて、校長は10月中旬から4か月かけて卒業生258名一人一人と校長室で個別面談を行った。3年間で成し遂げた努力の事実や将来の夢を語る生徒一人一人に対して、校長が成長を認め、誇りをもって生き続けるよう、個々の「自己実現」に向けて励まし続けた。

### 2. 生徒と教師の主体性を引き出す「年間9スパン指導構想」を基盤とした指導展開

本校は、これまで9月中旬に実施する「わかたけ祭」（運動会）と11月末に実施する「合唱祭」という2大行事を核としながら、生徒会活動を基盤として生徒の姿を高めてきた。しかし、若手教員が多く、指導経験の浅さから、「行事を実施するために何をどう行うのか」という場当たりの指導に追われていた。「何のために、いつ何を指導するのか」という視点が希薄になりがちで、行事の実施に対する負担感につながっていた。そこで、図2のように、縦軸を「生徒の意識・集団の質の高まり」、横軸を「生徒の活動の展開・指導の流れ」とした「年間9スパン指導構想」を描き、年間を通した指導の基盤とした。これは、一年間の教育活動を、月ごとで割るのではなく、各時期の指導内容等から年間を9つのまとまり（スパン）に分けて小単元化し、何を主眼とした指導が、どのように連続・発展していくのかを視覚的に描いたものである。これを生徒とも共有し、生徒も教師も中・長期的な見通しの中で、教育活動の充実に取組を進めることができるようにした。具体的には、「入学式」「学級目標宣言集会」「わか

たけ祭」「合唱祭」「未来を創る会」「卒業式」という学校行事を年間の指導の核とした上で、「学年・学級としての基盤づくり」→「学年・学級としての実績づくり」→「団・全校によるダイナミックな一体感づくり」→「学年・学級としての文化・誇りづくり」→「全校の高まりと学級・個の自立」→「屹立した一人」という流れによる年間9スパンを通した指導を構想し、生徒と教師双方が主体性を発揮することができるよう取り組んだ。

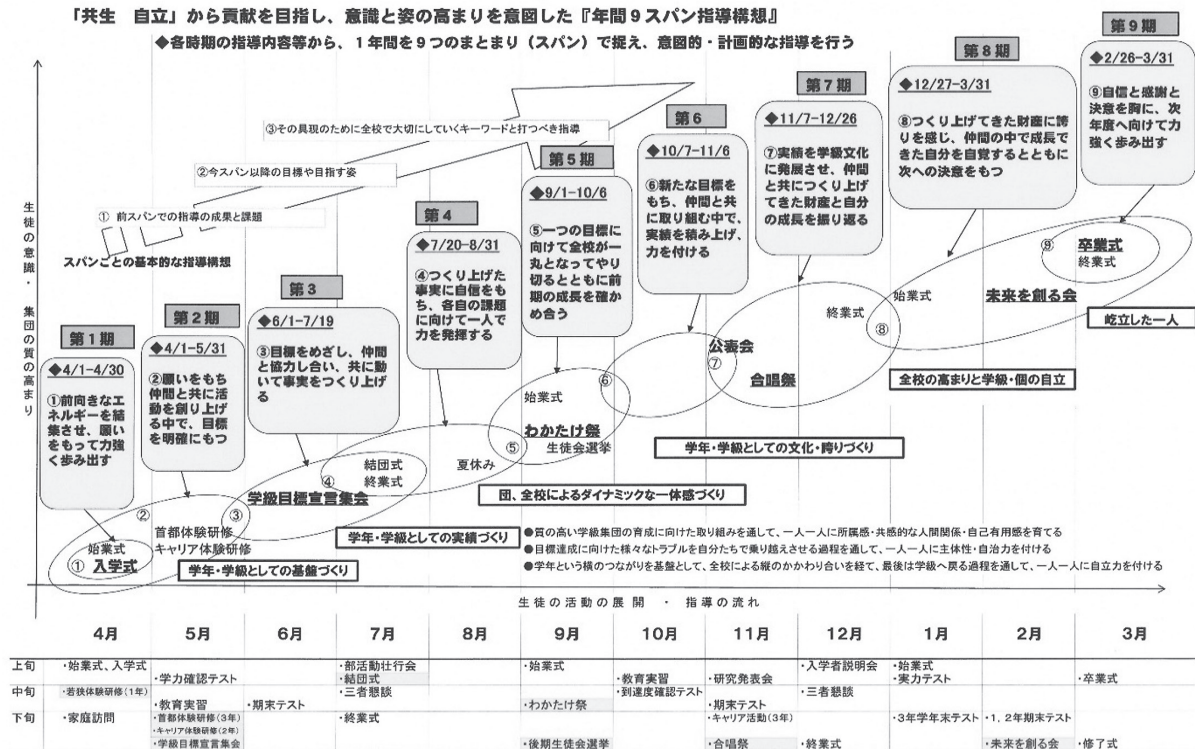


図2 生徒と教師の主体性を引き出す「年間9スパン指導構想」

### 3. 学校行事を生かした生徒会活動の工夫による主体性の向上

それぞれの行事は、教師が意図的に計画し実施するものであるが、活動の主体は生徒である。生徒会活動を中心として生徒自身が行事の企画・運営・実施に積極的に参画することにより、生徒の主体性の向上が期待でき、生徒の「自己決定」「自己実現」につながる。生徒会活動における基本的な学習過程は、「学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むこと」<sup>3)</sup>と示されており、冒頭で述べた本校の課題を克服するためには、各行事における取組過程で、自主的、実践的な生徒会活動を位置付け、学級経営に生かすことは極めて重要な視点と言える。

本校は、前述のとおり、「年間9スパンを通した指導構想」により、生徒と教師双方の主体的な取組が展開されるよう工夫した。その際、表1に示したとおり、生徒が所属する3つの集団の機能・役割を効果的に関連させることを念頭に置いた。そして、いずれの場合においても、「事実をつくる→褒める→支える→自分たちで動き切る→認める→主体的に動く→自己の成長を自覚する」といった過程を大切にし、「一人の願いが活動を生み、事実をつくり、集団としての活動の質と集団の一員としての自覚を高め、結果的に一人一人の主体性を育てる」といった指導を展開した。

表1 指導上大切にしたい3つの集団とそれぞれに期待したい機能・役割

【学級】	仲間の息づかいをも感じながら直接認め合い、指摘し合い、一人を支え合う集団
【学年】	意識・行動で一定の規範を維持し、学級での活動の質を維持する母体となる集団
【全校】	生徒会活動を核とした合意形成の上、所属意識をもち、大きな動きをつくる集団



## （１）学校行事に付加価値を付け、自発性を引き出し「自己実現」につなぐ

本校では、これまで当たり前のように設定されている行事を整然と実施することが目的化される傾向があった。例えば、「学級目標宣言集会」では学級委員が学級目標を全校の前で説明する、「合唱祭」では各学級が全校の前で合唱を披露し録音するなど、各行事において、それぞれ当日の姿づくりが大切にされていた。そこで、「年間９スパン指導構想」を基に、どのような願いをもち、自分たちをどう高めていきたいかを生徒会役員を中心に話し合い、自分たちで行事の在り方を工夫することで、取組に付加価値を付け、主体的、実践的な態度の育成に取り組んだ。

例えば、全校による「学級目標宣言集会」に至る過程で、「活動の質を維持する母体」である学年において、「息づかいをも感じながら直接認め合い、支え合う」学級で一人一人の願いを基に合意した学級目標づくりに向けた歩みの発表会をもった。「学級目標宣言集会」当日は、各学級が目標とそれに込めた願いを発表することに加え、学年のスローガンとその実現に向けた決意を表す学年合唱を新たに設定した。（図３）そして、これまで合唱発表のみであった「合唱祭」においては、会場に「一人一人の願いの集大成」である学級目標の現物を持ち込み、学級代表がそれを示しながら、人間関係形成の過程で乗り越えた仲間の事実を１分間で語り、その成果としての歌声を披露した。ある学級代表は、『自分と相手は違う』『自分は多少頑張らなくても大丈夫』という考え方が本気の仲間へ歩み寄ろうという気持ちをかき消し、クラス内の心は通じ合っていなかった。でも少しずつでも自分なりの努力を仲間と共にすることで、本当の力を出すことの意味を知った。」と語り、合唱を行った。こうった一連の取組により、「合唱祭」は単なる歌声交流会ではなく、自分や仲間に対する見方、考え方を見直し、お互いの人権感覚を磨き合う場であり、自分たちが目指す仲間の姿を再確認しながら、一人一人が生き方を考え「自己実現」を図る場であるという認識が深まった。



図３ 願いを語る学級目標宣言集会

またその企画についての話し合いの過程で、生徒会役員が、これまで外部の専門家と管理職等による審査のみで金賞・銀賞が決定されていたことの見直しを求めた。具体的には、「感動的な合唱を創り出した学級を自分たち自身で称える『生徒会特別賞』を新設したい」という願いが生まれ、生徒集会及び校長への提案を経て、実現していった。合唱祭の翌日の朝、全校生徒による投票結果を踏まえて自分たちで決定した各学年の「生徒会特別賞」を放送で発表し、自分たちで「穂中賞」と名付けた表彰状を渡しに教室へ出向く生徒会役員の姿とそれを満面の笑みで受け取る表彰対象学級の仲間の姿からは、これまで「誰かがどこかで企画してくれた行事に参加していた」生徒の意識が、「自分たちで行事を創り、実現した」という実感へ発展した手応えを感じた。また、この動きの背景には、これまで集団同調主義の下で見失いがちだった、生徒が本来もっている「自分たちでやってみたい」といった内発的な意欲を、生徒会指導委員長に抜擢された20代の教員のフレッシュな想像力や改革心あふれる助言が掻き立て、引き出したことも特筆に値する。

またその企画についての話し合いの過程で、生徒会役員が、これまで外部の専門家と管理職等による審査のみで金賞・銀賞が決定されていたことの見直しを求めた。具体的には、「感動的な合唱を創り出した学級を自分たち自身で称える『生徒会特別賞』を新設したい」という願いが生まれ、生徒集会及び校長への提案を経て、実現していった。合唱祭の翌日の朝、全校生徒による投票結果を踏まえて自分たちで決定した各学年の「生徒会特別賞」を放送で発表し、自分たちで「穂中賞」と名付けた表彰状を渡しに教室へ出向く生徒会役員の姿とそれを満面の笑みで受け取る表彰対象学級の仲間の姿からは、これまで「誰かがどこかで企画してくれた行事に参加していた」生徒の意識が、「自分たちで行事を創り、実現した」という実感へ発展した手応えを感じた。また、この動きの背景には、これまで集団同調主義の下で見失いがちだった、生徒が本来もっている「自分たちでやってみたい」といった内発的な意欲を、生徒会指導委員長に抜擢された20代の教員のフレッシュな想像力や改革心あふれる助言が掻き立て、引き出したことも特筆に値する。

## （２）形骸化を打破し、「合意形成」「意思決定」の過程を「自己実現」につなぐ

### ①わかたけ祭（運動会）団編成のエントリー制からの脱却

本校の特色ある教育活動の一つに、「エントリー制を生かした運動会の取組」がある。この取組は、平成25年度から導入されたもので、「わかたけ祭」（運動会）の団編成を形式的な縦割り集団で創るのではなく、4月からの各学級の取組の事実・実績をもとに相互に選び合い、その後の活動に生かすというものである。まずは1年生と一緒に活動したい2年生を選び、1・2年生が3年生を選ぶという方法で団編成を行う。他学年に指名してもらうためには、学級の団結を具体的な姿で示していかなくてはならず、必然的に活動が高まるように設計されている。しかし、この取組に対して、「指名されるために活動を行っている」「どの学級と組むと自分たちが有利になるかなど打算的な考えが垣間見られる」など、本来の趣旨から逸脱し、形骸化していることに対する危惧が職員はもとより、生徒たちから出されるようになった。そこで、令和元年度前期生徒会役員選挙において、「形骸化したエントリー制の見直し」を公約の一つに掲げた生徒会長候補が当選したことを契機に、エントリー制に

よる団編成からの意味ある脱却へ取組が推進された。その際、安易な多数決を急ぐのではなく、お互いの考えを理解、尊重し合った上で、方向について合意するといった「合意形成」に向けた話し合いを大切にしたい。そのために、以下のとおり、「問題を理解し、考えをもつ」→「様々な意見に気付く、考えを深める」→「論点を整理し、方向を模索する」→「納得できる方向を探り、決める」といった過程を意図的に設定した。

- i) 生徒会執行部会（提案検討） 4月当初 →「問題を理解し、考えをもつ」
  - ・「落ち着いて日常生活に向かうことができている現状から、もう一段階、次のステージへアップしたい。ステージアップとは、仲間の姿や思いに寄り添って共に高め合っていく姿、温かさをもって仲間と関わっていく姿のことで、その実現の一つとしてわかたけ祭の団編成を見直したい。昨年度までのエントリー制から脱却し、できるだけ早い段階で団編成し、交流期間を長くして関わり合いを深めていきたい。」
- ii) 臨時生徒議会 4月中旬 →「様々な意見に気付く」
  - ・生徒会執行部からの提案を受け、意見交換を行う。
- iii) 学級会 4月中下旬 →「お互いの考えを深める」
  - ・臨時生徒議会を踏まえ、団編成の在り方について議員が中心となり学級で討議する。
- iv) 第1回生徒議会 5月上旬 →「論点を整理し、方向を模索する」
  - ・団編成の在り方について、これまでの学級討議で出された意見を基に話し合う。
- v) 学級会 5月中旬 →「学級として納得できる方向を探る」
  - ・生徒議会が出された意見を踏まえ、再度、議員が中心となり学級で討議する。
- vi) 生徒総会 5月中旬 →「全校で納得できる方向を探る」（図4）
  - ・生徒議会や学級で深めてきた内容を踏まえ、全校で討議する。
- vii) 臨時生徒議会 5月下旬 →「納得できる方向を決め、取組を意思決定する」
  - ・生徒総会における全校討議とその後の学級討議を踏まえ、議会として決定する。



図4 合意形成に向けた全校討議

以上の過程を積み上げた上で、生徒会長から、「本年度の団編成について、エントリー制は今の自分たちには必要ない。発展的に脱却したい」という生徒会としての意思が校長に示され、「仲間と共に成長し、未来へつなぐわかたけ祭」というスローガンの下、新しい伝統づくりが始まった。

この一連の取組は、これまで、課題を感じつつも、行うことが当たり前となり形骸化していた前例を踏襲せず、自分たちで「合意形成」に向けて何度も話し合い、現状に満足せず未来につなぐために「意思決定」したり自主的に実践したりする姿

を具現する場であり、生徒会活動が大切にする自治力を育成することにつながったと考える。こういった生徒一人の願いが大きく集団を変え得るという経験や、自分もその高まり続ける集団の一員であるという自覚が、個々の生徒の「自己実現」につながって行くと考えている。

## ②「人権宣言」から「共生宣言」への発展的移行

本校には、「相手の気持ちを考えて行動します。自分で真実を見極め、正しく判断します。一人一人が自分の役割を果たし、支え合います」という3条項からなる「人権宣言」が平成25年12月に制定されていた。これは、全国でいじめをめぐる問題が社会問題化したことを背景に、平成25年6月に成立した「いじめ防止対策推進法」を受けて制定したものである。学校が落ち着きを取り戻しつつあったとはいえ、思いやりにかかる言動が見受けられたことに対して、信頼できる仲間関係を築くために制定され、全教室への掲示と毎月1回、人権宣言「唱和の日」が行われていた。しかし、このことも、前述の「エントリー制」同様、必然性は薄れ、形骸化が問題視されていた。そこで、生徒会執行部を起点にしながら、現在の生徒自身の手で、今の自分たちの活動ぶりに照らし、話し合いと「合意形成」「意思決定」の過程を経て、宣言を見直す取組を推進した。この取組においても、安易な多数決を急ぐのではなく、お互いの考えを理解、尊重し合った上で、方向について合意するといった「合意形成」に向けて、次のような過程を大切にしたい。

- i) 生徒会執行部会（提案検討 10 月当初 →「問題を理解し、考えをもつ」）
  - ・「現在の人権宣言がつくられた経緯を知っている生徒も教職員もほとんど見当たらず、学校の実態も当時とはかなり違ってきているのに、毎月、唱和するという形だけ引き継がれている。このことを踏まえ、今の学校の様子から、「今の自分たちが大切にしていること。今の自分たちの活動を支えている見方や考え方＝この先まで受け継いでいくことができるもの」として、新たに『共生宣言』を制定したい。」
- ii) 定例生徒議会 11 月中旬 →「様々な意見に気付く」
  - ・生徒会執行部からの提案を受け、「今、自分たちが大切にしていること」を意見交換する。
- iii) 学級会 11 月中下旬 →「お互いの考えを深める」
  - ・定例生徒議会を踏まえ、「今、自分たちが大切にしていること」を議員中心に学級で討議する。
- iv) 生徒総会（人権集会） 12 月初旬 →「論点を整理し、方向を模索する」
  - ・生徒議会や学級で深めてきた内容を踏まえて、人権集会として全校で討議する。
- v) 学級会 12 月中下旬 →「学級として納得できる方向を探る」
  - ・生徒総会における全校討議を踏まえ、「共生宣言」に込めるべき内容について討議する。
- vi) 臨時生徒議会 1 月中旬 →「納得できる方向を決める」
  - ・生徒総会での全校討議とその後の学級討議を踏まえ、「共生宣言」について合意する。
- vii) 「未来を創る会」 2 月下旬 →「合意した方向の確認と取組を意思決定する」
  - ・卒業を前にした最後の全校集会「未来を創る会」で発表し、取組を決める。

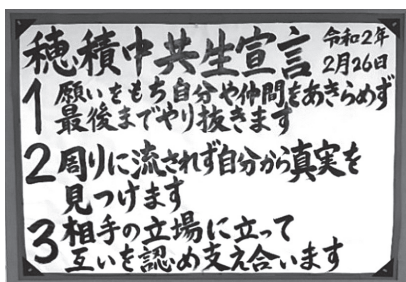


図5 未来につながる「共生宣言」き方』です。」

以上の過程を経て、図5の「共生宣言」が全校で合意され、新たな学校文化づくりが生徒たちの意志で始まった。この「共生宣言」には、以下のような前文が添えられている。

「穂積中学校は、これまで『人権宣言』を土台として、お互いに信頼できる仲間関係を築いてきました。そこで私たちは、今の穂積中学校のよさを未来につなぎ、より一層発展させていくために、新たに『共生宣言』を創りました。これは、穂中生として、これまで大切にしてきたことであり、これからも目指すべき穂中生としての『生

#### 4. 生徒会委員会活動の活性化と「社会参画」「自己実現」

『『各種の委員会』は、生徒会活動における実践活動の推進の役割を担うものであり、学校生活の充実・向上を目指すために生徒の立場から自発的、自治的に行われる活動である。生徒の実態や学校の状況に関わらず、前年の踏襲を繰り返すことにより、その活動がマンネリ化し、生徒のやる気を削いでしまわないように十分留意しなければならない。』<sup>4)</sup>しかし、本校では、各種の委員会の取組も前例踏襲が多く点検が主な活動となりがちで活動に広がり弱いという課題があった。そこで、これまで述べてきた前例踏襲からの脱却や新たな宣言づくりの流れに沿って、各委員会の常時活動の改革を推進し、アイデア溢れる活動づくりに取り組んだ。

特に、今回は、福祉委員会の活動改革を起爆剤とした。毎週曜日を決めて、ペットボトル回収をしていた福祉委員会の活動を改革し、「豊かさや温かさ、思いやりの心」といった価値の創出に取り組んだ。具体的には、まず「地域の福祉施設との交流」と「種から花を育てる活動」を取り入れた。担当教師も生徒も、種から花を育てた経験がなく、試行錯誤の連続ではあったが、種床に種を撒き、水分を管理し発芽を促し、ポットに植え替え栽培し、プランタへ移植し、温度と日当たりと水分の管理を委員会やその班員が当番として行い、美しい花を開花させることができた。委員たちは、小さな芽吹きを見つけた時、つぼみが開花する瞬間に立ち会った時などには、物言わぬ小さな植物が懸命に成長しようとするひたむきさに感動した。これまで経験したことのない生命の尊さと、その背景にある自分たちの優しい心遣いや丁寧な世話の価値を自分たちの言葉で全校に伝え続けた。春に撒いたコスモスの花で、秋のわかたけ祭（運動会）の来場者の心を和ませた。秋に撒き、手作りのビニールハウスで越冬させ育てたキンセ



図6 地域に花を届ける福祉委員



ンカの花で卒業式会場を飾り、文字通り「屹立した一人」の門出に華を添えた。また図6にあるように、福祉委員会が地道に交流を重ねてきた地域の高齢者福祉施設へ、自分たちが種から育てた花を届けることで、地域に優しさと笑顔を届ける地域貢献の第一歩を刻んだ。

#### IV. 考察・分析

実践研究を行った3年間を通した「生徒の学校生活全体に対する意識」について、全校生徒による学校評価（5段階による評価）の結果を見てみると、「学校全体の雰囲気が明るく、活力がある」という項目は、平成29年12月 3.45 → 平成30年12月 3.54 → 令和元年12月 3.58 と年々高まってきた。特別活動を基盤としながら実践した「新たな学校文化の創造」について、生徒自身の実感として一定の成果があったと言える。

具体的に、Ⅱ. 2. で述べた研究の重点に沿って、成果と課題を考察する。

##### 1. 学校行事をこなすための場当たりの指導ではなく、見通しをもった指導は展開できたか。

毎年度7月と12月に行っている教員による「自校評価」（全教員対象）について、重点とした「意図的に見通しのある指導ができているか」についての結果は、以下の通りとなった。

令和 元年度	60%以上の実現実感	40%以下の実現実感
7月	29人	10人
12月	36人（+7）	4人（-6）

記述では、「年間9スパン指導構想については、段階的に見通しがもてるが、出口での生徒の姿のイメージの共有化をさらに進めたい」「活動の目的は何か、そのために事前にどんな手を打つのかを考えて指導に当たることができたが、個々の生徒の達成感を生み出すことに弱さを感じる」という意見が出された。

2大行事を核としながらも、大きな集団による活動づくりに終始せず、学級の高まりから個に力を付ける指導へつなぐという、先を見通した指導についての意識は高まったと言える。一方、生み出したい生徒の意識や目指す姿をさらに明確にし、生徒も教師も共に成果を評価し合える年間のカリキュラムに高めていくことの必要性を感じる。

##### 2. 「合意形成」「意思決定」の過程を大切に「社会参画」の意識は醸成できたか。

平成31年度全国学力・学習状況調査における「生徒質問紙調査」の中で、「合意形成」「意思決定」に関わる質問事項についての結果は、以下のとおりとなった。

- 質問「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか」

回答	「当てはまる」	「どちらかといえば、当てはまる」	「合計」
全国（公立）	25.3%	46.3%	71.6%
本校	32.5%	56.3%	88.8%（+17.2）

- 質問「学級活動での学級の話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決め取り組んでいると思いますか」

回答	「当てはまる」	「どちらかといえば、当てはまる」	「合計」
全国（公立）	21.0%	44.6%	65.6%
本校	26.9%	55.8%	82.7%（+17.1）

- 質問「地域や社会をよりよくするために何をすべきか考えたことがありますか」

回答	「当てはまる」	「どちらかといえば、当てはまる」	「合計」
全国（公立）	11.5%	27.9%	39.4%
本校	11.2%	23.9%	35.1%（-4.3）

自治力を育てる生徒会活動を重視した教育活動を展開したことで、行事を核としながら生徒たちの自主性や創造性が引き出され、生徒主体の活動の芽が生まれ始めた。上記のとおり「自分たちで話し合い、解決方法を決めて、自分自身が努力している」という意識は、本校生徒は全国公立学校の平均値を17ポイント以上、上回った。一方で、地域や社会と自分との関わりに思いを馳せ、自分の力でどう地域の未来の文化創造に貢献していくのかという意識や意欲は十分高まっていない。

### 3. 生徒の創造性を引き出し、積極的な貢献意識の醸成と「自己実現」への発展は実現したか。

令和元年度の11月に、本校は3年間の実践研究のまとめを研究発表会で公表した。その際、これまで一堂に会して、来賓のご挨拶も含めて行ってきた全体会を取り止めた。その代わり、学校代表として当時の生徒会長が、授業公開に当たる学級の生徒全員、全教職員及び260名ほどの参観者の方々に向けて、放送による挨拶を行った。生徒の創造性や主体性、積極的な貢献意識の高まりを示すものとして、以下に一部抜粋して掲載する。

「略 前期では、会長をリーダーとして、穂積中の2大行事の一つである『わかたけ祭』の在り方を見直しました。落ち着いて生活ができていた今、現状を維持するだけでなく、次のステージにアップするために、全校討議を経て、昨年度までの団編成の方法から脱却しました。このように昨年度までとは違う、新たな試みに挑戦し、わかたけ祭は感動的で、あたたかな、素晴らしいものになりました。今後は、合唱祭をやり遂げ、新しい共生宣言の採択に向かって行きます。

私が3年間、穂積中で生活をしてきて、今年が、最も生徒が主体的に学校を高めようとしていると感じます。後期が始まった今、私を含む生徒会役員15名には、『自分から進んで行う』『願いや目的をもって活動する』『仲間と共に高め合う』そんな穂積中にしたいという強い願いがあります。この願いのもと、昨日まで、学習・生活・環境・そして広報委員会のコラボによる『後期スタートダッシュ活動』を行いました。特に学習委員会では、各クラスが目指す学習の姿を話し合うとともに、挨拶の声だけでなく、礼にもこだわる姿や、『全員参加』の授業に向けた呼びかけを継続する姿がありました。取組でこだわった姿が、今日の研究発表会であらわれてくれることを期待しています。

校長先生は、私たちによく『伝統は守るものではなく、自分たちで創り上げるものだ』と言われます。現状に満足するのではなく、今の自分たちにできること、さらに高めていけることは何かを常に考えて行きたいと思います。そして仲間と共に、これからも、今の穂積中でしか創り上げることができない伝統を築いていきたいと思います。今日は、これまでの成果を示し、新たな挑戦を続けている穂中生の姿をぜひご覧ください。穂中生の皆さん、頑張りましょう。ありがとうございました。」

## V. まとめと課題

上記の生徒の言葉は、令和元年度の11月という実践研究の終盤途中のものではあるが、この3年間の実践研究の成果として、「学校の主人公は生徒であり、伝統としての『新たな学校文化』創造の当事者は生徒自身である」という風土が定着しつつあることが伺われる。こういった意識の醸成が、冒頭で述べた「卒業式における屹立とした一人」の姿につながっていったと考える。また、集団としての統一感があり、全体の規律が大切にされてきた本校では、不登校傾向の生徒の存在が大きな課題であったが、平成28年度には24人であった新規不登校生徒数が、平成29年度には15人、平成30年度には7人となるなど、学校全体の生徒自身の主体性が高まるにつれて、激減していった。生徒にとって学校が「自分自身の居場所」として認識されてきた成果の一端と捉えたい。

しかし、個々の生徒が納得の行く「合意形成」にまで至っているか、主体的な「社会貢献」ができていくかという点については、今後の課題である。学校で培った力を土台として、一人一人が地域の未来の担い手としての自覚をもち、自分の力で文化創造に積極的に貢献していこうとする意欲を一層高めていく必要があると考える。

## 注・文献

- 1) 文部科学省(2017):「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編」, 11-13.
- 2) 文部科学省(2017):「中学校学習指導要領(平成29年告示)」, 165.
- 3) 1)に同じ, 74.
- 4) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2016):「学級・学校文化を創る特別活動【中学校編】」, 73.